

第4回 公民で作る社会体験学習

# 探究学習「シブヤ未来科」の挑戦 一人一人のウェルビーイング重視

日本総合研究所 教育事業開発プロジェクト 時吉 康範



教育新聞によると、東京都渋谷区は2024年度から全区立小中学校で午後の授業を「シブヤ未来科」として総合的な学習の時間を年間70時間から約150時間に拡充する大胆な教育課程の変更を本格的に始める。小学6年生の1年間の流れは、「探求基礎」（企業連携によるホンモノ体験。50時間程度）、「共通テーマによる探求」（70時間程度）、「My探求」（35時間程度。最終的にはMy探求の時間を増やす予定）とのことだ。

同区教育委員会統括指導主事の「探究学習を通じた、思考力・判断力・表現力、問題解決能力は、これからの予測困難な社会を生きる子どもたちにとって求められる、将来を通して大いに役立つ力であり、子どもたちが豊かなホンモノ体験を通して自ら問いを立てたり、仲間と協働して新たな価値を創造したり、よりダイナミックな学びへと変革する」との発言に、筆者も賛同する。

## 学力低下を懸念する声も

一方、保護者からは「（現在の教育課程から探求学習へのシフトによって）子どもの学力が低下するのでは」という不安の声が上がったとも掲載されている。

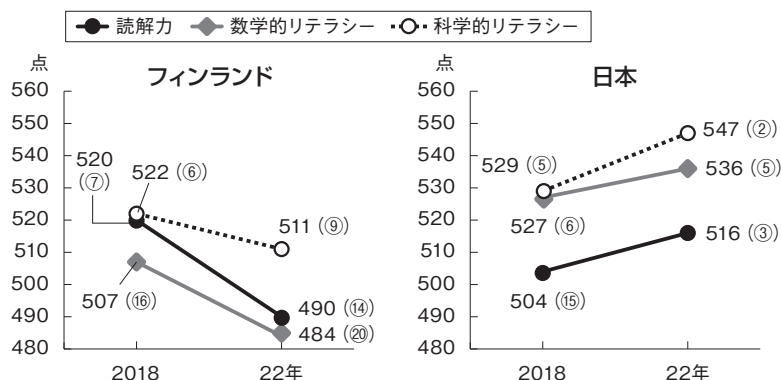
筆者はユリティスキュラ（フィンランドの社会体験カリキュラム）からヒントを得て日本独自版を開発しているところだが、「不安の声」を目にしてフィンランドの「PISAショック」を思い出した。OECD（経済協力開発機構）のPISA（国際学

習到達度調査）は、義務教育修了段階（15歳）でこれまでに身に付けてきた知識や技能を実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを測る。フィンランドはPISAが始まった00年代初頭から世界トップ級だったが、近年は得点の低下が続き22年調査では18年と比べ読解力が30点減の世界ランキング14位に、数学的リテラシーが23点減の20位に、科学的リテラシーが11点減の9位となった。日本は全ての項目で得点を伸ばし、それぞれ世界3位、5位、2位だった（図）。

フィンランドは1990年代に詰め込み型や競争を促す教育ではない、ウェルビーイング（心身の健康や幸福）ファーストの教育に舵を切った。信州大学の伏木久始教授によると「フィンランドでは教育の目的は学力を高めることではなく、一人一人の子どもが自分らしく生きていく自信と勇気、スキルを身に付けることだとの考え方から、教員や子どもたちの主体性を重視」するよう変革した。

それでもPISAは世界トップ級だったため、同国の教育は世界から驚きをもって注目された。し

図 フィンランドはPISAの得点が低下傾向にある（カッコ内は世界ランキング）



かし時を経て、PISAの得点は大きく低下した。これと同じような現象が、探求学習に舵を切った渋谷区でも起こるかもしれないと思ったのだ。

### 国民の「幸福度」が低い日本

同時に、国連の提唱で設立された「持続可能な開発ソリューション・ネットワーク (SDSN)」の「世界幸福度報告書」の結果を思い出した。これは簡単に言えば国民約1000人へのアンケート調査で、幸福度を構成する項目別の設問への満足度を回答者が点数付けする主観的調査だ。フィンランドは世界幸福度ランキングで6年連続の総合1位だ。日本は上昇傾向にあるものの47位と順位は決して高くない。この2つの調査結果から言えることは、フィンランドは「15歳における知識や技能が高なくても、国民の幸福度は高い」ということだ。一方、日本は「15歳における知識や技能が高くて、国民の幸福度は高くない」となる。

幸福度調査は「幸福とは何か」というあいまいだが重要な問いに答えようとする試みであり、世の中への投げかけでもある。幸福はどんな項目から構成されるか、どうやって測るか、どのように国際比較するかなどは確立したものではないだろう。それでも「人生の選択の自由度」及び「人生評価／主観満足度」の2つは主観的調査であるがゆえ、意味を持つ項目だと考える (表)。

筆者が学童期の社会体験カリキュラムの開発を進めている動機の一つは、自身が接した生徒や学生が世の中の職業をあまりにも知らず、未来の選択肢が窮屈そうにみえたためだ。「いろいろな生き方があってよい」と気づく体験機会を提供したいと思った。もう一つは、日本の子どもたちは肯定的未来志向や自己肯定感・効力感、満足度が低いとされるなか、「自分を表現して失敗してもよい」体験機会や、「自分に自信をもってよい」と気づく体験機会を提供したいと思ったためだ。

筆者自身が話したフィンランドの大人の多くは、自然体で話を聞き、まっすぐ語る。「自分は自分。それでよい」「失敗しても気にしない」という思考様式が伝わってきた。米国で筆者がよく見かけ

表 フィンランドは「人生の選択の自由度」「人生評価／主観満足度」の世界幸福度の順位が高い

世界幸福度調査の項目	フィンランド		日本	
	スコア	順位	スコア	順位
人生の選択の自由度	772	1位	556	71位
人生評価/主観満足度、他	2,363	16位	1,513	108位

(注) スコアは×1000で表示。順位は2023年の項目別世界ランキング

た自分を誇示するような外向きの自信ではなく、静かで淡々とした内側の自信という感じだ。

伏木教授は、フィンランドは「子どもたちの自己肯定感や『自分は自分でよいのだ』という意識を高め、子どもたちが社会の中でどのように生きていこうかと考え、そのために必要な学びとは何かを自分で選べるようになることを重視している」と述べている。教育が「人生の選択の自由度」「人生評価／主観満足度」に直結していて、幸福度の総合スコアに大きな影響を与えているようだ。

### 区の実行力と社会の寛容さが問われる

日本はこれまで人材を比較し上位層をすくい取る、あるいは、突出した人材を育成するという考え方が主流だったが、シブヤ未来科は一人一人のウェルビーイングを尊重して人材全体を押し上げるこれからの考え方につながる公教育の変革だと筆者には見える。そこでは、子どもたち一人一人が社会の一員として生きていく思考様式を習得することを期待する。例えば、シブヤ未来科の探求基礎は個々の企業・機関の断片的な知識・技能を提供する職業体験ではなく、企業と企業のつながり、企業と公共機関のつながりと、社会における自分の役割を感じられる社会体験が大切になる。

そして、そのような社会体験学習が区内共通の探求学習カリキュラムとして確立され、児童・生徒の思考様式が、ステークホルダー (利害関係者) である教育関係者、保護者、地域住民、企業などにも広がり、自治体全体の思考様式の変革につながることを望ましい。ただ、シブヤ未来科は壮大な挑戦の導入期にあり、期待する成果につながるまでは長い道のりになるかもしれない。渋谷区の実行力と社会の寛容さが問われるところだ。 **G**